「あーた、アメリカ行きなはれ！」
～依田・宮川組が残してくれたもの～

ヒロセ マリ

大阪芸術大学映像学科1983年卒業
Wagner College留学、2019年大阪芸大大学院入学
Will Lee、Chris Parkerなど海外ミュージシャンとの
デザイン提携や他、音楽、映像制作

「あーたアメリカ行きなはれ」
卒業面接で依田義賢学科長にそう言われ、その夜、両親に電話がきた。LA近くの大学を勧められたが、ビリー・ジョエルやKISSに夢中でNYへ。毎晩JAZZやROCKライブがあり、今も当時のミュージシャンと交流が続いている。帰国後、テレビ山口入社、音楽番組を編集。大好きなアーティストと関わる仕事ができて楽しかった。今回この誌面を頂いたので私の社会人初仕事から今日までシンクロしている演奏学科客員教授・木根尚登(TM NETWORK) 先生にお話を伺うことにした。木根教授には映像学科でも2021年公開の産学映画出演をお願いし、前・大森学科長との真冬の撮影を思い出す。1970-80年代の話から色んな話題を頂き楽しいインタビューになった。

木根(K)：1980年、あの頃というのは、僕には画期的だったね。その頃は憧れが洋楽で、ボブ・ディランを教えてくれたのが吉田拓郎さんだったりね。自分の中で本当にフォークは衝撃的だった。先輩がビートルズのLet it beをかけてて LP、LP、LP って聞こえるんだけど何だろうって思ってて、「あれはLet it be って言ってるんだよ。」って英語に達者な子が教えてくれた。あの頃はジャズとかクラシック、ロック、フォークに歌謡曲、演歌とか、ものすごく大雑把なカテゴリーだけど、そんな時代だった。中学校1年生の時に先生から自分の夢を書きなさいって言われてね、その頃僕はもう確信してて「ミュージシャン」って書いたんだ。
「ミュージシャンはなかなか実現できないんで、勉強をしっかりしてください」って先生に言われた(笑)。
ヒロセ(H)：今は音楽を過去も今も時差がなく年代も関係なく聞く事もできるし発表、発信できる時代ですね。
K：そして、何よりほんと大阪芸大のように学校が、大学があるってすごいなって思う。本当にもう声を大にして言わせてもらうけどあの頃、音楽の専門学校もなかったから。あっても、音大とかね。
H：そうですね。あっても、ピアノ科とか声楽科とかクラシックで。
K：ただね、今もあの頃の僕らの時代も同じだなって思うのは色んな人が集まって来ると、びっくりするぐらい技術の高い人たちを見るんだよね。そこで人と自分を比べず、自分を信じてやってきた人がやっぱり上に上がっていくわけ。それはもう今の芸大の中でも、先生たちが声を大にして「人と自分を比べて欲しくない」って言ってると思う。そういうことが、自分の中で、ここまで来れたっていうか、諦めなかったっていうか。比べなかったからこそ、やめないで来られた。
H：木根さん達TMを見てて思うのは、昭和、平成そして今の令和でもそれぞれの変化に沿って綺麗に時代の波に乗って続けていかれてますよね。
K：続けてるがゆえに、出会いがあるんだよ。最近何かで読んだんだけど、人は生まれ持って、みんな1本の針を持っているって。でね、その針で、この厚く大きな壁の向こうにある「夢」をこの針で壁を開けるか開けないか。プロという夢に届く壁は大きくて、厚いから無理だと思って、その針を捨てちゃう人も居るかもしれない。だけど中には「壁の向こうにどうしても行ってプロになるんだ」と思って、365日、24時間穴を開け続けて向こうに行こうとゴリゴリしてたら、それ見てた人がいてさ、「穴開けるの？俺たちはもっと大きい釘持っているからよーし、みんなで開けようか」って言ってくれたりする。続けてたら、後ろから有名なプロデューサーがさ、大きいドリルを持ってきてさ、「俺も一緒にその壁を開けるよ」って言ってくれて、その壁に穴があくんだよ。これも出会い。それこそ、僕らのデビューの頃に、これからどうしようかって思ってて色んな所に行って山口県にも行って、僕らの壁を開けるのを手伝ってくれた。山口と北海道は自分の歴史の中で、やっぱり大きなものが残ってる。それも出会いだよね。僕は芸大の学生さんたちに言いたいのは、とにかく、針1本持って、持ち続けてって。もし飽きたら、ちょっと休んでもいいし。

左から、太田先生　宮川先生　滝沢先生（1980年頃）
映像学科 OB 北村芳男さん撮影

H：それは演奏学科に限らず、映像、デザイン学科や全部の学生、卒業生が夢を叶える針を持っているんだよって、今、私もそう受け取れて嬉しいです。
K：そうだよ。針はね、みんな持ってる。
今、夢を叶えてる人たちは、夢を叶えることにに協力してくれる人に出会える「運」があるかどうかなんだって最近読んだ本にあってね、デビューした頃に山口に行って、「じゃあ山口でTM NETWORKやりましょう。TMメインで番組をテレビ山口でやりましょうよ！ラジオもライブも！」って言って協力してくれる人達に出会えたからね。
H：オープニングのテーマ曲を「1974」に決めて番組が出発しました。あの頃、私にとってTMはどこにも似てない音楽で、寧ろ当時のDuran Duranとか洋楽に近い要素をもったメロディに聞こえて、「これは絶対いける」と上司に推した記憶があります。
K：そんな話を段々と中央の局の人達が聞きつけてね、キー局の歌番組に出してもらえることになって。まさにそういう時が、そのドリルで穴が開いて壁の向こう側に行けた感じがした。もちろんね、努力っていうのは当たり前でね。ただ本当に諦めなかった。成功を前提にやってたけど、売れなかった時にね。先輩に言われたのが、それを人のせいにしているときは、うまくいかないよって言われた。
H：他責ってことですね。
K：うん、そういう時は上手くいかない。何かを成功するっていう人はね自分をすごいんだって信じて自分の好きなものをやるって信じて、相手をリスペクトしてるんだって。そんな風にして、行動し始めてそういう気持ちで過ごしてたら、てっちゃん（小室哲哉氏）に出会えてね、そして色んな音楽関連の人にも出会えてきた。だから色んな事あっても、あいつのせいで、ダメなんだっていうふうには思わない。よっぽどのことがあったらそれは言うけど(笑) 自分が変われば出会いも変わるし、自分が変われば、相手も変わる。いや、これ本当。
H：それは今の学生や、若い人たちもいち早く気付いてほしいことですね。
K：今、若い人たちに色々あっても、自分の針を1本持って、夢への挑戦をやめないでほしいね。
H：芸大へは演奏学科の特別講義で何度か来校されてますが、どんな印象を持たれてますか？
K：芸大に行った時に色んな所を見学させてもらってるんだけど、昔の人が見たらもう、設備もそうだけど、びっくりする、驚く！そこでも、あいつの方がいいもの作ってるとか、人と比べちゃったり、比較し始めるとね上手くいかない。そう比較すること、それはだけは絶対にやめてほしいな。

(TMでの音楽活動のことから色んな事に話を展開していただいて、木根教授、有難うございました。掲載はインタビューの一部になります。全編はまた別の機会をお楽しみに)

卒業後、社会人初仕事でTM NETWORKのビデオをアッセンブル編集した。その映像の一部が、2025年公開のドキュメンタリー映画「Carry on the memories (blu-ray2025/12発売)」に入っている。
映画館でエンディングロールに自分の名前が流れた時、依田先生と宮川先生の「アメリカ行きなはれ」を信じてよかったと思った。仕事で芸大OBと組むことも多い。木根教授のインタビューも含め、色んなアーティストと出会えて幸せだ。それは学生時代に教授たちが残してくれたものが確かにあるからだ。
芸大と映像学科にありったけの感謝を込めて、まだまだ私も夢を追う。

推薦者／企画広報委員会　委員 岡田 成生

木根 尚登

大阪芸術大学演奏学科客員教授
音楽家、小説家、音楽プロデューサー
1984年 TM NETWORK として
EPIC SONY よりデビュー

木根 尚登 著
「電気じかけの預言者たち -再起動編-」

2018年の小室哲哉氏の引退宣言、このTM NETWORK最大の危機から復活を果たし、2024年のデビュー40周年ツアーまでのメンバー3人の想いと、そして彼らを支える様々な人々との交流も本書のみどころの一つ